

事業報告書（令和6年度）

事業名 親子で育てる無農薬・無化学肥料米づくり

団体名 岡山まごころ給食審議会

担当者名 莊司かおり

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

◆種まき&苗代（なわしろ）作業 2024.5.12 （参加人数4家族13名）

6月の田植えで植え付ける苗の育苗会社に訪問し、種まきの作業体験の機会を頂いた。苗箱600枚分に種もみと土を入れていく作業を行い、その後田んぼに移動し苗箱を並べる作業を実施。土と種もみが入った苗箱は1枚でも2kgの重さになり、少しでも衝撃が加わると土や種もみが外に出てしまうため、丁寧且つ慎重さを要する作業でありながらも、スピード感も必要となり、かなり重労働な作業であることが分かった。

農業では苗半作といういわれがあり、農産物の出来は苗の出来に左右されると言われるほど、苗作りは重要であり、昨今の気候変動の影響により雨の降り方なども年によって変わってきているため、観察力と柔軟な対応力が問われることを新たに知る機会となった。



◆田植え 2024.6.29 @岡山市東区 （田植え実施人数：12家族37名）

2年目となる今回の田植えは、一般からも参加を募り実施。米粉麺や発芽酵素玄米などお米をテーマにしたマルシェにも参加いただくことで、農と食のつながりをより体験いただく機会としました。初めて手植えを体験する親御さんも多く、最初は戸惑いながらも徐々にペースは上がり、1.5時間かけ朝日米の苗を0.8反の範囲に植え付けを完了、最後まで植え続けた小学生もいた。

実施後のアンケートからは、お米を育てることの大変さが身に染みてわかった、お米を大切に食べたい、そして稲刈にも参加して成長具合を見たい、といった意見が多数上った。



◆田んぼのいきもの観察会 2024. 7. 22 @岡山市東区 (参加人数：9 家族 21 名)

米作りのスピンオフ企画として、岡山県自然保護センターにて稲作圃場の生き物調査を長年行っている先生をお迎えし、田んぼの生きもの観察会を夏休みに実施。

子ども達は 1 人 1 つずつ網と虫かごを持ち、調査隊さながらにいきものを探し、見つけた生きものは、虫かごから白いバットに移してじっくり様子を観察。クイズも交えながら、種類毎にどんな生き物なのかを先生から説明してもらい、田んぼにはどんな生き物が生息するのかを知る機会となった。また、あぜ道に産み付けられたカルガモの卵も観察することもできたことで、水の中だけでなく圃場の周辺も含め生物多様性について学ぶこともでき、田んぼがより身近に感じられる機会となった。



◆稲刈り 2024. 10. 27 @岡山市東区 (稲刈実施人数：14 家族 51 名)

田植え同様に一般参加者を募り、手鎌とコンバイン利用による稲刈りを同時並行で実施。まず、コンバインがスムーズに作業をできるように、田んぼのへり刈り（四隅の刈取り）として手鎌で刈り取り、そしてそれを束にして藁で結ぶ作業を実施。

その後、足踏み脱穀機や唐箕（とうみ）といった昔ながらの器具使い刈り取った後の作業も体験し、同時にコンバインの作業過程を見学・お手伝い。手作業と器械作業を比較できたことで、それぞれのメリットデメリットを知ってもらうとともに、これからの持続可能性視点からも各自どのように考えるかを意識づける機会となった。



◆乾燥・粳摺り・袋詰め作業 2024. 10. 29 @岡山市東区（参加人数：3 家族 6 名）

収穫したお米はすぐ乾燥作業を実施してもらい、その次の工程である粳摺り（もみすり・皮を取り玄米の状態にすること）作業や袋詰め作業を体験。そして石貫きや色彩選別といった、見たことがなかった作業を農家さんは行っており、お米の収穫から消費者が手にするまでに様々な工程を経ていることを知る機会となった。当体験を通して、重い米袋をもちあげる体力が必要こと、そしてたくさんの器械類が必要なこと、それらのメンテナンス等も含め、いかに限られたスペースで必要な作業をスムーズに進めていくのか、工夫が詰まっていることもよくわかる時間となった。



◆家はざがけ&粳摺り 2024. 12. 15 @岡山市中区（参加人数：4 家族 11 名）

はざがけというのは、刈って束にした稲をそのまま天日干しにして、稲束を乾燥させる工程。稲刈り参加者は、各自手刈りした稲束を自宅にもちかえり、家はざがけを行い、脱穀（稲わらと稲粳に分けること）、粳摺り（粳をとって玄米の状態にすること）を手作業にて体験。この日は手で粳摺りを行いきれなかった粳を持ち寄り、家庭用の粳摺り器（器械）を使って玄米にする作業を行った。

器械もパーフェクトはないので皮が取り切れなかったりするが、スピーディな作業に器械のありがたさを体験するとともに、お米が食べられるようになるまでの大変さを身をもって実感することができた。



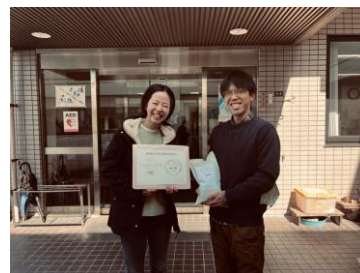
◆子ども食堂への収穫米提供① 2024. 2. 5@岡山市中区

旧幼稚園園舎を活用し、地域の方々の居場所づくりとして様々な活動をおこなっている『NPO まんなか』さんにお米提供（寄付）。3 月に実施する子ども食堂で使用予定となっており、旭竜地区のたくさんの子ども達に安全なお米を食べていただけるとともに、地産地消や食の大切さ、そして食と農のつながりをおとして地域の持続可能性について触れていただく機会づくりとさせていただきます予定である。



◆子ども食堂への収穫米提供② 2024. 2. 14@岡山市北区

“食”を通じた多世代交流の場づくりとして子ども食堂を長年実している『つしまみんな食堂』さんへお米を提供（寄付）。こちらも 3 月の催しで利用予定となっており、私たちのまごころ込めたお米が、つしまみんな食堂さんのまごころ込めたお料理づくりとともに、多世代の方々に届くことを楽しみにするとともに、津島・京山地区の皆さまにも食を通じた地域の持続可能性の学びの一つとして農とのつながりを考えていただける機会とさせていただきます予定である。



2. ESD の視点

1 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

1. 米作りの大変さと農家さんの作業の尊さを理解すると同時に、日常にお米を食べられるありがたさや、お米一粒一粒を大切にいただきたいという思いを持つ結果につながった。
2. 実体験したからこそ、家庭内での話題にあがったり、体験したことや抱いた思いを友人や周囲に伝えたい、そして自分の知らなかった点を自分なりに調べてみたいという次のステップへつなげることができた。
3. 稲作 2 年目として、昨年とは違う場所で行ったこともあり、手配・準備・農作業について、昨年とはまた違う考慮が必要となり、団体としての稲作の経験値を高めることができた。

②どのように学び合いを取り入れたか

「実体験」＋「比較」＋「連続性」＋「課題の共有」を通して学びを深める機会づくりを行った。

1. 手作業と機械作業の両方の実施

当年度も手作業と機械作業の両方を体験できる機会を設けた。どちらがいいかという白黒をつけるためではなく、それぞれのメリットやデメリットをまずは実体験として知ることを通し、今後の当団体での稲作でどう生かせるかを考えるため、また農業の実状を知るためである。種まきは器械利用と手作業の両方を体験、稲刈りは手刈りとコンバイン刈りを両方実施、脱穀作業も家での手作業と機械作業（見学）を実施、比較要素を盛り込むことで、持続可能性を考える上での、それぞれの考えや学びを深める機会を設けた。

2. 自宅作業の実施

稲刈り（手刈り）で刈った稲を自宅に持ち帰り、収穫後から食卓に並べるまでの作業を手作業で体験する取組みを行った。家で持ち帰った後は、乾燥・脱穀・粃摺をすることになるが、粃摺り作業が手作業ではとても難しいことも体験者は親子で体感し、お米が食べられる感謝を深めることができる機会となった。

3. 種まきから食べるところまでの体験

当年度は苗をつくるための種まき、田植え、稲刈り、収穫後作業を経て、食事としていただくところまでの一連の作業を体験することができ、前年度よりもまた一段と農から食へのつながりを実体験という形で理解を深めることができた。

4. いきもの観察を通して田んぼのことを知る

田んぼはお米をつくる生産活動の場のみならず、たくさんの生命を育む場でもあることを知る機会となった。今回は余裕があればやろうという企画として実施した観察会ではあったが、食や農を支える環境視点からの持続可能性を考える上でも、漏らしてはいけない点であることが理解できた。

5. 日本の食をめぐる重要課題の認知

田植えイベントでは、日本の食料自給率と食料安全保障の問題をシェアする時間があり、日本の農業が抱える問題について危機感を覚える時間にもなった。その後のアンケート結果からも、現在の日本が抱える食料に関する問題を自分なりに調べていきたいという意見が見てとれた。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

1) 実体験＋比較からの学び

実体験は印象にも残り、また土に触れる喜びや楽しさを覚える人も多く、田植え参加者は稲刈りも参加したい、稲刈り参加者は来年の田植えにも参加したい、等体験を通じた学びを深めた姿勢や、周りにも声をかけたいという意欲づくりにつながった。

2) 親子参加型の体験活動

親子で一緒に体験することは、思い出づくりになるとともに、その後の家庭での共通言語として話題に登り、話し合い考える機会創出を促すことができると考える。当年度も圃場でのフィールド体験だけでなく自宅ハザガけを取り入れることで、家でも親子で作業をする機会をつくった。その中で、日々食にするお米について親子で理解を深める機会となった。

3) 収穫米の利用

当会では、生きる力をはぐくむ食育企画として、大人向け上映会と子供向け食育ワークショップを9月に行った。子ども達には昨年度収穫した同事業のお米を使用し、作って食べる喜びを体験してもらうと共に、当会のお米を利用することで、保護者の皆様にも農と食がつながっていること理解してもらう機会となった。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

1. 参加者範囲の拡大

当初の予定どおり参加対象を一般の方にも広げ、田植えや稲刈りそして生き物観察会といった、親子一緒に参加・体験できた人を増やすことができた。アンケート回答では、それぞれの年齢

に応じた楽しみ方や学びができたことや、家族でうちでお米の大切さを話をするようになったなどの回答を得ることができた。

2. 収穫米の販売を通じた啓発

当年度も無事お米が実り、収穫米の一部の販売を実施することができた。当団体の活動趣旨へ賛同される方や持続可能性への取組に興味を持つ方に購入をいただき、食べていただくことを通じて、当事業の目的の啓発にもつなげることができた。

3. 子ども食堂応援&啓発

目標にしていた子ども食堂へのお米提供は、2月末時点で2団体に受け取っていただくことができた。たくさんの親子に関わってもらい作った私たちのお米を、また別のたくさんの親子に食べてもらえる喜びを得るとともに、食べる方々にも、食を通して農とのつながりの認知や持続可能性を高める意識づくりの機会とさせていただいた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

当事業では、土と触れ合う実体験そして実際に食べるところまで到達することで、食と農のつながりをより強く感じることができるということがよく分かった。今年度は、令和の米騒動があった影響で、食と農の持続可能性に危機感を覚え考える人が増えたかと思うが、私たちは引き続き当事業の実施を通して、学びを深められる人を増やしていきたい。

今後の展望

1. 事業間のつながりを通じた学び

当団体が別途実施している食育イベント等において、当事業での収穫等を利用することで、食と農の繋がりを理解し、岡山の食や農をめぐる現状、そしてそこから持続可能なものについてくには各自がどうできるかを考えるきっかけづくりになる内容を引き続き盛り込んでいく。

2. 稲作を通じた食農教育授業

小学校・幼稚園等での稲作を通じた食農教育プログラムの提供につながる働きかけを行ってきたいと考える。当年度の当事業のアンケート結果では、稲作づくりを通じた農体験を園や小学校でも積極的に導入してほしいかどうかについては、100%の保護者が賛同という結果となり、農体験こそが最高の食育になったという意見が得られた。市内でもすでに実施している園や小学校もあるがどちらかといえば割合は少なく、この体験に1人でも多くの子ども達が触れる機会を提供したいと考え、メンバーの子どもが在籍する校区を中心に学校やPTA・町内会等との連携を図りつつ、実施にむけた動きを作っていける働きかけを作っていきたい。

3. お母さんだからこそ発信

当事業により得た当団体の強みは消費者であるお母さんという立場でも、自分たちなりの農体験談を周りに伝えられる経験値であると考え。そして事業を通じ生産者さんの話を聞く機会にも恵まれているため、消費者発信として食と農の持続可能性を高めるためのアクションを起こしていきたいと考える。まずは2025.03.08に映画「百姓の百の声」上映会@岡山市東区での実施を予定している。お母さん達視点での発信だからこそ、同じお母さん達に伝えられることも多いと考える。

これらの活動を通じて、岡山地域の持続可能な社会作り寄与できると考える。

(様式第 8 号)